

宮城県刈田郡蔵王町松川流域における 弥生時代遺跡の分布調査 (1)

須藤 隆・長谷川 真
相原 淳一・田中 敏

1 はじめに

東北地方における弥生時代の研究は、伊東信雄、杉原莊介をはじめとする多くの研究者の努力によって確実に進展してきたと言える。しかしながら、弥生時代における稻作農耕社会の歴史を再構成するために必要な資料は、この地方ではなお不充分である。弥生時代に、この地方でどのような構造をもった農耕社会が営まれたのか、その農耕社会はどのような過程を経て成立したのか、そしてどのように発展したのか、縄文時代における狩猟・漁撈・採集活動を基盤とする社会から初期農耕社会へ変革する過程、そして古墳時代の階級社会へ発展する過程など、究明しなければならない問題が山積している。

仙台市を西から東へ流れ、太平洋にそそぐ広瀬川の左岸、自然堤防上に立地する南小泉遺跡のように、規模も大きくかなり安定した弥生時代農耕集落が成立していたと推定できる遺跡も知られている(村主：1943、伊東：1950)。けれども、このような代表的遺跡においてすら、住居、貯蔵施設の構造、規模、配置関係など、集落の構造を知る手掛りは全く欠けている。また、集落を支えた労働・生産の場である水田やそれに伴う灌漑施設など農耕技術の実態も全く知られていない。この時期の墓制については、若干の貴重な資料と研究がある(伊藤：1958、1961)。しかし、この場合でも、墓域全体の構造、集落と墓域の関係、墓制の変遷に関する研究は、やはり未踏の分野となっていると言わざるをえない。

生産用具については、石庖丁など、その一部が知られているにすぎない。農耕具は、全くその資料が欠けており、生産活動、特に農耕技術がどのような内容を持っていたかを究明するには、今後の資料探求と研究を持つほかない状況である。

このように、東北地方の弥生時代農耕社会とその文化については、明らかにしなければならない幾多の問題をかかえている。

この地方の弥生時代研究にとって、現在、もっとも必要とされる方向は、次の4点にまとめられよう。

- (1) これらの遺跡から出土する土器は、「型式」概念(鈴木：1964)にまで、その認識内容が揚められることによって、一定の土器製作技術、装飾意匠の伝統を共有する集団が占有する生活領域を知る指標となる。そして同時に、技術・伝統の変化に基づく型式の差異は、相対的

編年の基準となる。このような土器型式の認識と、その変遷を把握し、各地域で型式編年を確立することが、重要な前提である。

- (2) それぞれの地域において、集落の構造、変遷を、生産の場や墓域などとも関連させ、総体的に捉えることを目指し、遺跡の分布状態・規模・立地条件など遺跡の在り方を踏査によって、丹念に資料収集することが、もう一つの重要な前提である。
- (3) 稲作農耕に関連する施設や用具など、農耕技術の内容を具体的に明らかにするためにも、個々の弥生時代遺跡において、周囲の微地形を、可能な限り詳細に把握しておく必要がある。
- (4) それぞれの地域において、弥生時代の文化内容を把握するために、遺跡・遺物に対するキメの細かい分析が必要であり、そのための方法論を確立する必要がある。

これらの諸点を踏まえ、各地域における地道な研究成果の蓄積が不可欠である。福島県郡山盆地で、1969、1970年に伊東信雄が計画し、実施した一連の弥生時代遺跡の発掘調査は、基本的には、このような研究目的をもって、組織的に進められたものと言える(伊東他：1970, 1971)。また、興野義一は、宮城県北部の大崎耕地、江合・鳴瀬川流域において、長い年月にわたり、熱心に踏査を続け、この地域における弥生時代の研究に大きく貢献した。

興野氏の案内で、筆者も多くの弥生時代遺跡を、この地方でくり返し踏査する機会に恵まれた。以後、大崎耕地、阿武隈川下流域など、いくつかの地域における弥生時代遺跡の在り方に関心を払ってきた。現在、このような遺跡の在り方を捉える上で、踏査の必要をもっとも強く感じている地域(水系)の一つに、阿武隈川の支流である白石川・松川流域がある。

この地方における弥生時代遺跡・遺物に対する研究・資料蓄積の歴史は比較的古く、片倉信光・佐藤庄吉・中橋彰吾などによって意欲的に進められてきた(片倉、中橋、後藤：1976)。また、東北縦貫自動車道工事に伴なう事前調査によって、断片的ではあるが、若干の資料が増加した。(宮城県教育委員会：1971, 1972)。けれども、この地域における弥生時代集落の研究は、なお進展がみられない。もっとも基礎的な研究である土器型式、その変遷の把握すら、従来の研究の枠を出ていない。伊東の設定した「円田式」(伊東：1955)の標式資料は、一点の精巧なつくりの壺形土器である。この壺は、たしかに一つの土器型式の特徴をよく具現している。けれども、これに伴なうべき土器群一「円田式」一の実態は、現在のところ、必ずしも明確でない。今後、この土器群の土器組成(器種構成)、土器製作技術、施文、装飾方法などを解明し、土器型式として確立しなければならない。そのために、基準となる資料が必要不加欠である。

筆者は、このような認識のもとに、宮城県南部の白石市、蔵王町、村田町周辺における縄文時代終末から弥生時代にかけての遺跡を踏査する計画をたてた。この地方において遺跡の分布調査を進めてきた佐藤庄吉、中橋彰吾、阿子島香氏などの収集資料を観察する機会を得、相原淳一との綿密なうち合せの結果、1979年度の踏査地として、宮城県刈田郡蔵王町の永野地区を

選定した。

2 遺跡踏査の方法

遺跡分布調査を進めるにあたり、遺跡の表面観察・遺物採集・記録方法の上で、いくつかの確認事項を設け、フィールドにのぞんだ。

- (1) 遺物は、可能なかぎり、畠地一筆、あるいは一区画毎に全面的に採集する。その区画毎に、A A, A B, …とアルファベット2文字で呼称を与え、採集地区の記録をとる。
- (2) 遺物が散布する台地、あるいは微高地など地形的「まとまり」を、区画毎に全面的に踏査し、遺物の散布の範囲を確認して、一遺跡とし、記録をとる。
- (3) すでに命名された遺跡名とその範囲については、これに基づいて、遺物の分布の確認を行って、これを記録し、名称、位置関係などにあらたな混乱を生じないように処理する。
- (4) 採集の単位となる畠地など区画毎に、その地目と利用状況を記録する。
- (5) 遺跡名は、小字名をもってあてる。同一小字内で、立地地形を異にしたりして明らかに別遺跡と判断される場合には、第Ⅰ遺跡、第Ⅱ遺跡、…と呼称する。同一遺跡内のブロックと判断される場合、あるいは本来同一遺跡であったものが、開田などによって分断されていると判断される場合には、遺物採集の都合上、A地点、B地点、…と地点名を与える場合もある。
- (6) 遺跡が立地する地形については、可能なかぎり、詳細に観察し、記録カードに記入し、写真撮影を行う。

3 遺跡踏査の概要

遺跡分布調査は、1979年4月3日から4月7日の5日間にわたって行った。調査には、相原淳一、田中敏、長谷川真、須藤隆の4名が参加した。

調査の対象とした蔵王町の永野台地は、蔵王連峰刈田岳(標高1795m)付近にある火口湖から流れ、東麓へと降る松川の左岸に形成された低位河岸段丘である。標高120mに達し、松川との比高は10m前後である。南北の幅約500m、東西長3kmに及ぶ、広々とした台地である。現在、台地の南半は、その大部分が開田され、本来の地形を失っている。県道(白石・青根・川崎線)の北側には、広々とした段丘が残っており、畠、果樹園として利用されている。台地の北側には、狭く、浅い開析谷をはさんで、永野台地よりも10m程高い上野原の丘陵がひろがる。この台地は、東西2km、南北200m程のひろがりをもつ。

今回の調査では、この広々とした台地のうち、わずかな地域しか対象としえなかった。永野台地では、寺門前、谷地、十文字、門前、円明院、西裏、東裏、下永野遺跡を踏査し、上野原台

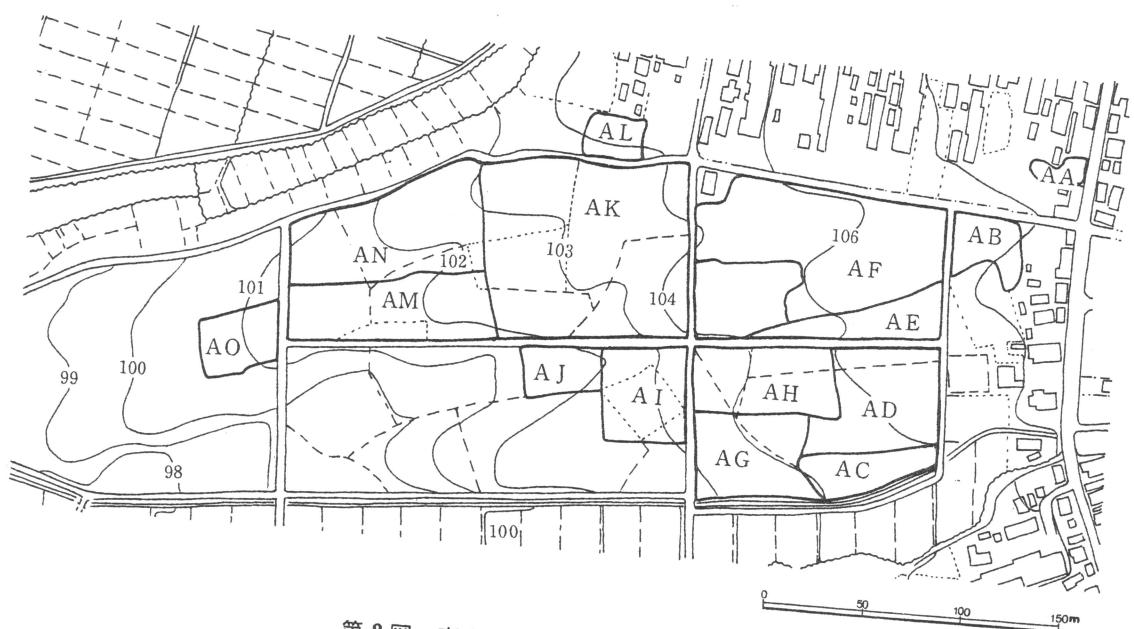
地では、天王廻遺跡を確認することができた。

以下、調査を行った遺跡についてその概要を記す。

- (1) 寺門前遺跡(図1—1) 宮城県刈田郡蔵王町円田寺門前に所在する。永野台地のほぼ中央に位置し、円明院の門前一帯にひろがる。南北250m, 東西250mに及ぶ。畠、果樹園として利用されており、一部は水田となっている。現時点での踏査することができる範囲は、一通り表面観察をした。縄文時代中期から後期にかけての遺物が多量に散布している。
- (2) 谷地遺跡(図1—2) 同町円田谷地に所在する。県道(白石青根川崎線)をはさんで、寺門前遺跡の南にひろがる。今回は南北130m, 東西60m程の範囲を踏査したにとどまる。地形の上では、東西におよぶ遺跡の範囲がのびてくると推定される。寺門前遺跡と一体の遺跡として捉えることもできる。縄文時代中期から後期にかけての遺跡である。
- (3) 十文字遺跡(図1—3) 同町円田十文字に所在する。永野台地の段丘崖付近に位置する。かって、相原が確認した十文字遺跡の東南部分にあたる。東西約40m, 南北約30mの範囲に遺物の散布をみた。北側は開田によって削られており、そのひろがりは不明である。縄文時代中期の遺物と、奈良・平安時代の土師器が採集されている。
- (4) 円明院遺跡(図1—5) 同町円田円明院に所在する。円明院の裏手、永野台地の北側を開析する幅30m程の沢、沖積面をはさんで対岸に振り出す小台地上に位置する。南北50m, 東西100m程の範囲を踏査した。縄文時代中期、奈良・平安時代の遺物が散布している。
- (5) 西裏遺跡(図1—6) 同町円田西裏に所在する。蔵王町役場の西方の台地上にひろがる。県道の南側は開田で一段低く削平されている。遺物は、今回の踏査で南北150m, 東西400mにわたって散在し、いくつかの比較的散布密度の高い地域がある。遺跡の北側は地形的に浅い開析谷で途切れ、両側は寺門前遺跡との間100m程では遺物の散布がみられなかった。「円田式」の標式資料である壺形土器の出土遺跡である。弥生式土器片は、少量ではあるが、遺跡の東部に散在している。縄文時代中期の遺物が多数採集されている。
- (6) 東裏遺跡(図1—7) 同町円田東裏に所在する。蔵王町永野部落の東南方にひろがる。松川左岸の永野台地東南端付近にあり、東西150m, 南北350mに達する(図2)。東西両側に浅い開析谷のがい、細長く南へのびる舌状台地に遺跡は立地し、地形的にはまとまりが多い。遺物は、いくつかの分布のまとまりをみせているが、中央部北東よりの畠地(AH区)において、特に弥生土器の散布が著しかった(表1)。縄文時代中期、後期、弥生時代「円田式」期、古墳時代の遺物や奈良・平安時代土師器、須恵器などが散布している。
- (7) 下永野遺跡(図1—8) 同町円田下永野に所在する。東裏遺跡が立地する舌状台地の南に位置する低い独立丘陵上にある。開田、用水路改修工事で本来の地形は大きく姿を変えている。わずかに土師器片の散布がみられるが、そのひろがりは確認できなかった。



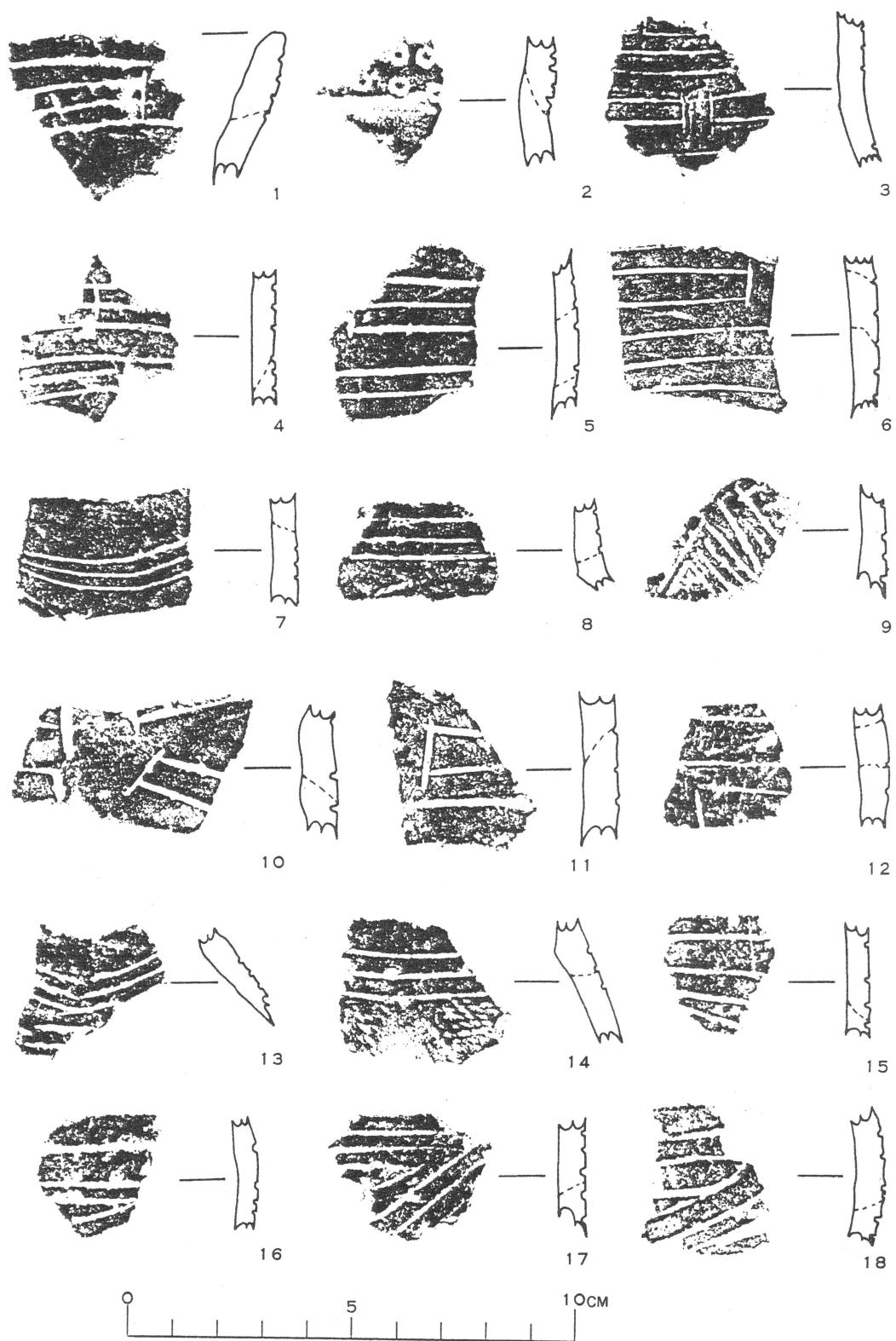
第1図 遺跡分布図



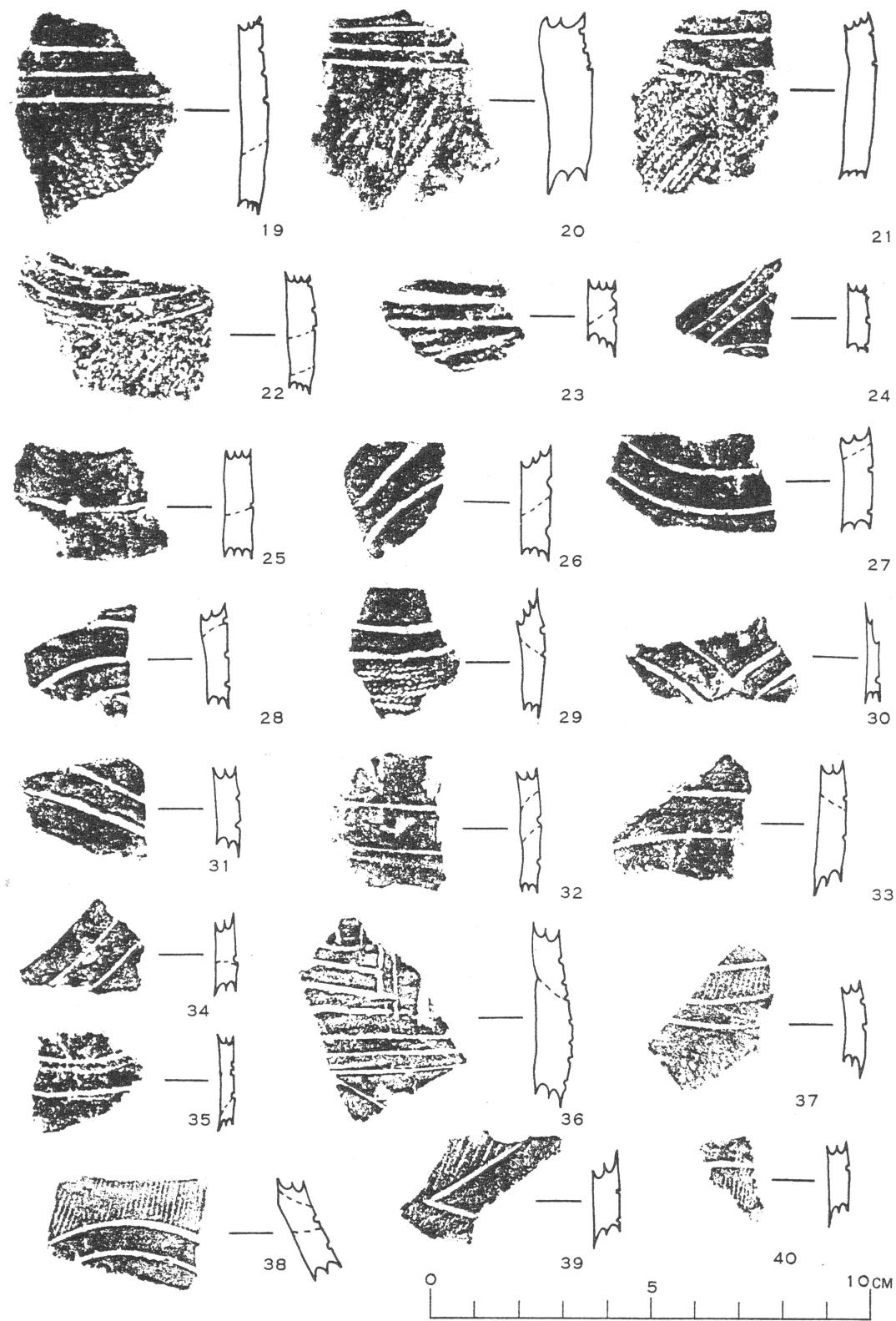
第2図 東裏遺跡分布調査実施地点図



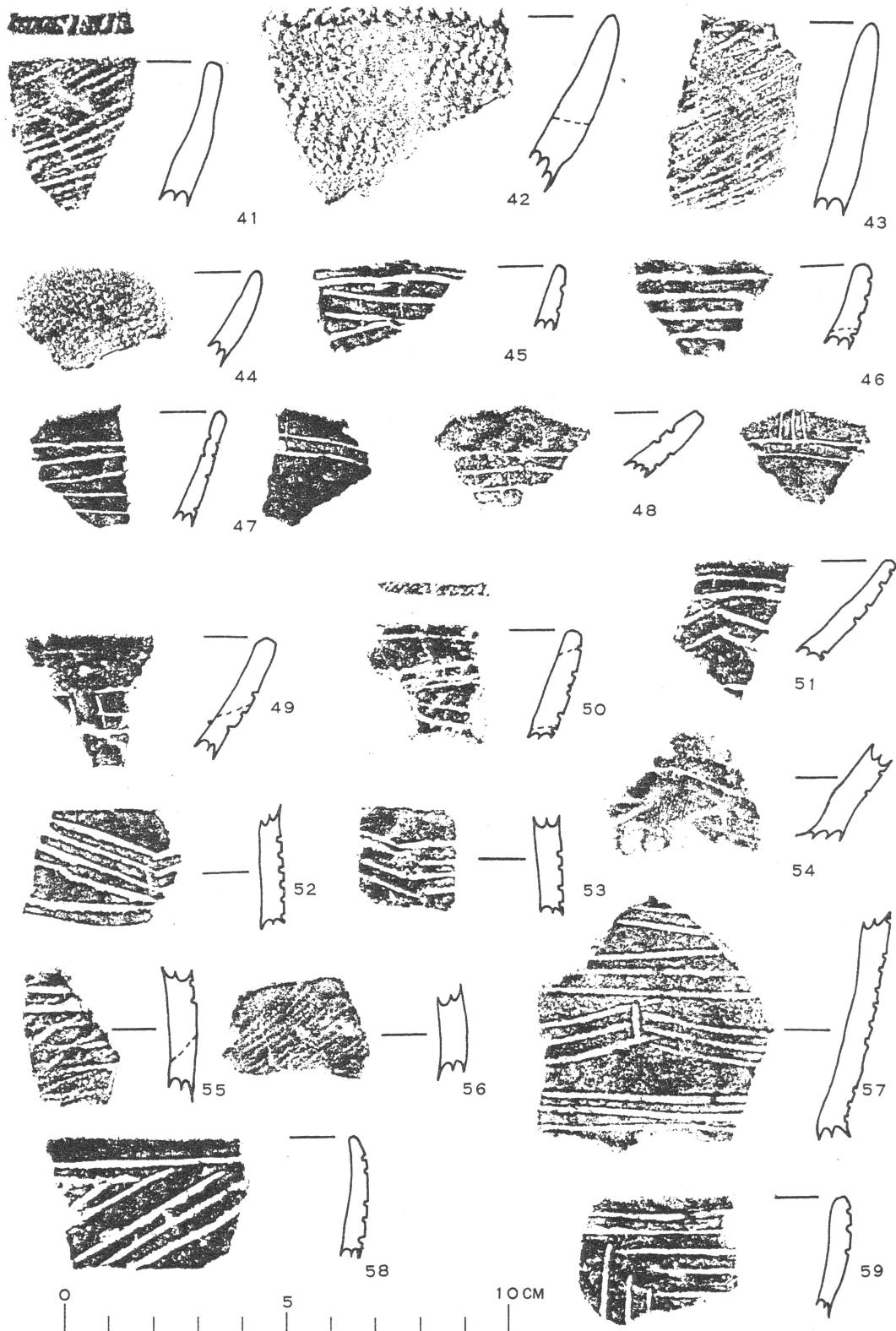
第3図 天王鬼遺跡分布調査実施地点図



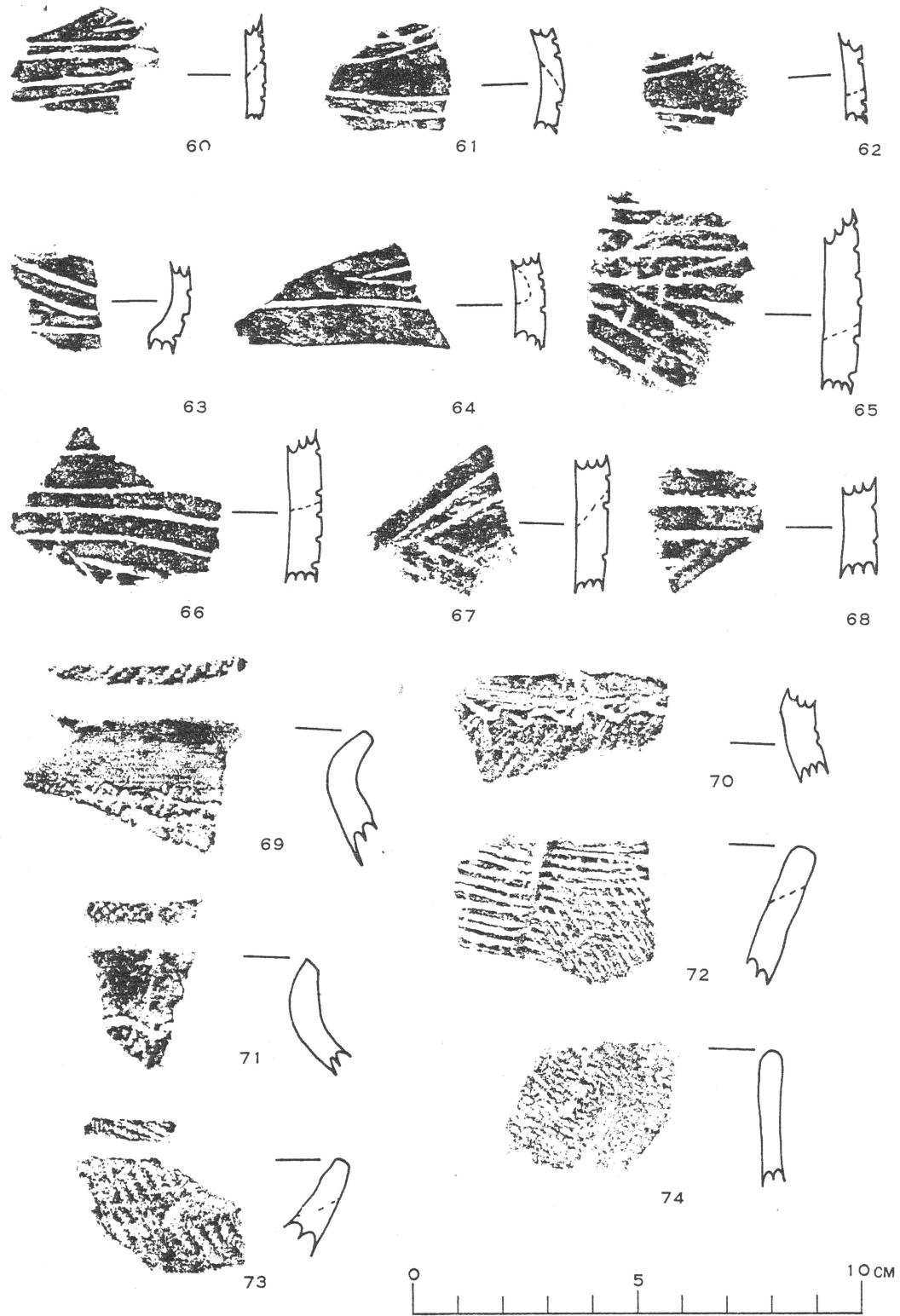
第4図 採集土器拓本(1)



第5図 採集土器拓本(2)



第6図 採集土器拓本(3)



第7図 採集土器拓本(4)

(8) 天王囲遺跡(図1—9) 同町円田塩沢に所在する。上野原台地の東部に位置する。今回踏査できたのは、南北300m、東西80m程の範囲である(図3)。広い範囲にわたって遺物の散布がみられる(表2)。踏査範囲の南端(A S区)に天王古墳(直径約28mの円墳)がある。縄文時代から奈良・平安時代までの遺物が散布している。特に、遺跡の東南部分(A N, O, P区)には、多数の弥生土器が散布していた。

この他に、いくつかの地点で遺物の採集が行われたが、遺跡の範囲を確認できなかったため、今回はふれない。

5 遺物について

今回の踏査によって採集された遺物は、かなりの量となった。ここでは、遺跡での分布状況などが把握できた東裏遺跡と天王囲遺跡の弥生土器についてふれる。それぞれの遺跡における遺物の分布状態を表1, 2に示した。

弥生土器は、東裏遺跡では228点、天王囲遺跡では217点が採集されている。このうち、土器の形態、装飾・施文手法などを理解することができる資料は、東裏遺跡で77点、天王囲遺跡では78点ある。このうちから74点を取り出して図示した。今回は分析の都合から、両資料を一括して扱い、器形別に示した。出土遺跡および地区は観察表(3, 4)の末尾に記した。

その器種には、壺形土器(図4—1~18, 5—19~40)、鉢形土器(図6—45~54)、口縁頸部が長く、わずかに内彎し、頸部がかるくくびれる鉢形土器(図6—57~59)、浅鉢あるいは蓋形土器(図6—41~44)、甕形土器(図7—69~74)などがみられる。仙台市南小泉遺跡、蔵王町大橋遺跡(宮城県教育委員会: 1971)、柴田郡村田町北沢遺跡(宮城県教育委員会: 1978)、福島県郡山市柏山遺跡などから出土した資料でもって、その形態を確認できる。

これらの採集資料の施文手法をみると、幅1, 2mmの細い筆描沈線文が圧倒的に多い。連弧文、重方形文、渦文、短形文などがみられる。竹管刺突文(図4—2)が天王囲遺跡から出土している。磨消縄文、あるいは充填縄文手法(図5—37, 39)をもつものもわずかに含まれている。地文の縄文は、 $L\{R$, $R\{L$ (稀)、撚糸文(L, R)、異条縄文などがみられる。樹形団式にしばしばみられる植物茎を回転した擬似縄文(図5—38)も含まれている。

図4—2の如きやや異質なものも含まれているが、東裏遺跡と天王囲遺跡の採集資料の間には、特に差異は認められない。いずれも大橋遺跡や北沢遺跡出土資料とよく共通した特徴をもっている。これらの特徴の多くは、「円田式」の壺形土器(伊藤: 1966)にみられる特徴もある。

個々の土器製作手法の観察については、表3, 4にまとめて記述した。

(長谷川 真・須藤 隆)

6 結 語

今回踏査を行った永野地区において、9遺跡のうち、3遺跡が弥生時代遺跡であることを確認した。西裏遺跡では、遺跡の東端付近でわずかに弥生土器片を採集した。東裏遺跡では、その東北部分(AH区)に弥生土器の散布がみられ、低い舌状台地平坦面の中央付近にあたるこの一帯に、遺構、包含層のひろがりが推定される。また、この遺跡は、原地形を比較的よく保持していると判断された。天王岡遺跡では、遺跡の東南部に弥生土器の散布が著しかった。上野原台地の東南へ張り出した舌状台地上に、弥生時代の遺構や包含層がひろがっていると推定される。この遺跡も比較的よく原地形が残されている。

採集された資料は、2遺跡とも共通した内容をもった弥生土器である。伊東信雄の設定した「円田式」に相当すると判断される。

ある地域を調査対象地として選定し、その地域一帯の弥生時代遺跡のあり方を調査することは、すでに述べたように、考古学的研究の基本である。このような視点から地域研究の一歩を踏み出した段階で、結論的なことを記すことは避けなければならないが、それでも、同一時期に属すると推定される弥生時代遺跡が、この松川流域において、かなり近接して群在している様相の一端をうかがうことができたと言える。また、その立地も、この地域の地形が複雑であることにもよるが、さ程一様ではないと言える。時間的に極めて限られた踏査であったため、対象とした永野、上野原台地のわずかな部分を一巡したにすぎない。この地域における踏査を、今後、機会をとらえてくり返してゆきたい。記録方法、踏査方法など、実際に現地に臨んで不備な点が多かった。それらの点については、今後の踏査で改めてゆかなければならぬと考えている。

この踏査を計画・実施するにあたって、蔵王町教育委員会社会教育課、佐藤清志氏、中橋彰吾氏、阿子島香氏にお世話になった。また、資料の整理には、荒俣省子、岩屋淳、飯塚晴夫、佐久間光平、須田良平、林勉君の協力をえた。記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献(アルファベット順)

- 伊藤玄三(1958) :「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44-1 PP 11-28
伊藤玄三(1961) :「東北日本における弥生時代の墓制」『文化』25-3 PP 50-80
伊藤玄三(1966) :「弥生文化の発展と地域性—東北—」『日本の考古学』 III PP 204-220
伊東信雄(1950) :「南小泉石器時代遺跡」『仙台市史』3 PP 13-31
伊東信雄(1955) :「東北」『日本考古学講座』4 PP 112-118
伊東信雄・須藤 隆・木本元治(1971) :『郡山市福良沢遺跡発掘調査報告書』
伊東信雄・須藤 隆(1972) :『郡山市柏山遺跡発掘調査報告書』
片倉信光・中橋彰吾・後藤勝彦(1976) :『白石市史』別巻

宮城県教育委員会(1971)：『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報<刈田郡蔵王町地区>』

宮城県教育委員会(1972)：『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報<白石市・柴田郡村田町地区>』

宮城県教育委員会(1978)：『北沢遺跡発掘調査概報』

村主岩吉(1943)：『仙台市東郊—仙台飛行場を中心とする弥生式文化の研究—』『古代文化』14—5

PP1—36

鈴木公雄(1964)：「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21 PP1—5